

# 助詞「の」によって作られる連体修飾語の意味と用法

イイン・マルヤンティ・フイスティアワティ

## 1. はじめに

日本語には、名詞が助詞「の」を伴って他の名詞を修飾する場合がある。これは、初級の教科書でもごくはじめの方で出されるのが普通だが、形が簡単なだけに、意味内容は多様である。例えば、「私の家」（所有者）、「絹のハンカチ」（材料）、「十時の会議」（時）など、「の」には様々な意味がある。

また、例えば「ドイツの本」のように、「ドイツが本を持つ」（所有者）、「ドイツで本を作る」（生産地）、「本がドイツを扱う」（対象）など、助詞「の」に結ばれた二つの名詞の意味関係が色々な意味に解釈できる場合もよくある。このような助詞「の」によって作られる連体修飾語を取り上げ、参考書と教科書の解説に基づいて、連体修飾語を構成するものとしての「の」の意味と用法を考えてみたいと思う。

## 2. 修飾の定義、種類と原則

修飾の定義は種々ある。まず、大塚・中島編（1982）『新英語学辞典』によると、修飾というのは、すでに独立した意味を持つ文・節・句・語に対して、何らかの限定・記述を加えることである。また、寺村秀夫（1982）は次のように「修飾」を定義する。

文中のある語 X に、ある語、または語の集まり Y が付随して、その全体が語 X の属す語類と同じ働きをするとき、Y は X を修飾するといい、Y を X の修飾語・句・節、X を被修飾語という。

上の「付随」というのは、形式的に、その文からその部分を取り去っても、その文の文法的な骨組みは変わらないということと、意味的に、付随する側の意味内容が、される側の語の意味を特定化し具体化しよりくわしくするような役割において結びついているという両面を含む。従って、

太郎の亀が帰ってきた。

太郎と亀が帰ってきた。

という文はどちらも、「太郎」「亀」という二つの名詞が結びついているが、はじめの「太郎の」は、修飾句で、「亀」を修飾限定しているが、それに対し、「太郎と亀」の場合は、

「太郎」と「亀」が対等の資格で、並列的に結びついている。

日本語における修飾は普通、大きく分けて**連体修飾**と**連用修飾**の二つがある。国語学会編(1980)『国語学大辞典』東京堂出版、の「修飾語」という項(p. 482)には、「(1)「ひっそりと咲く」「美しく咲く」「きれいに咲く」など副詞や形容詞・形容動詞の連用形から構成されるもの、(2)「あらゆる人」「春の花」「美しい花」など連体詞や体言に連体助詞「の」がついたもの」が修飾語として取り上げられている。(1)が連用修飾の、(2)が連体修飾(名詞修飾ともいう)の具体例である。

日本語の修飾方式におけるもっとも重要な点は、いずれの構造においても、「修飾する語句」(修飾語)が、「修飾される語句」(被修飾語)に必ず先行するという大原則である。アラビア語では「難しい本」を「キターブ (本) サアブ (難しい) 」と言うし、英語では「昨日買った本」を“The book I bought yesterday”というが、日本語では被修飾語を後から修飾することはない。例えば、

- ・ 色々な考え方。
- ・ 部屋のドア。
- ・ 抜き差ししない事態。

いずれも原則に従っている。連用修飾の場合も、同様である。

- ・ 仕事をテキパキと片つける。
- ・ かえすがえす口惜しい。
- ・ 雨が降ったら止めましょう。

こうして、修飾語などが被修飾語に先行するという原則は、SOV という基本語順から導き出せるものであり、日本語を規則的な文法体系を持つ言語と見なしうる、重要な根拠であると言える。

### 3. 修飾の分類

寺村(1991)は、連体修飾部と被修飾語(底の名詞)との関係を「**内の関係**」と「**外の関係**」の2種類に分ける。

- 〔彼がその時受けた〕 罰 (内の関係)
- 〔竹で背中を100回叩く(という)〕 罰 (外の関係の内容補充)
- 〔彼が仲間を裏切った〕 罰 (外の関係の逆補充)

「内の関係」と言われるものには、(1)「二つの文が同一指示対象をもつ名詞をもつこと」、(2)「消去される名詞がその(連体修飾節の)述語に対して一定の格助詞を伴うような格関係に立っていること」という二つの条件がある。上のaでは、「{彼がその時(罰ヲ受けた)罰}」のように、「罰」が「受けた」という述語に対して「を」格を伴うような格関係をなしている。他にも、「が」・「に」・「へ」・「で」・「から」・「まで」・「と」などの格助詞を伴うものがある。これらの修飾節の意味特徴は「非内容的」である。底の名詞の内容を表すというよりも、底の名詞に付随的に説明を付け加えるからである。

「外の関係」の連体修飾の場合は、底の名詞が修飾節の述部に対して一定の格を伴うような格関係をなさない。意味的には「内容補充」と「逆補充」に分けられる。「内容補充」というのは、修飾節が底の名詞の中味を表すものである。上のbの場合、連体修飾節はどんな「罰」であるかを表している。一方、aの場合は「罰」という名詞を「特定」はしているが、どんな内容の「罰」なのかは述べていない。外の関係の「逆補充」(または「相対補充」)は、底の名詞に対して相対的な概念、および上のcのように底の名詞と因果関係にあるものの内容を補充する修飾節である。例えばcでは、「彼が仲間を裏切った罰」では「彼が仲間を裏切った」結果、「罰」を与えられたということで、修飾節と底の名詞の関係は因果関係になる。

#### 4. 色々な連体修飾語

すでに述べたように、修飾関係のうち、体言の概念内容を説明・限定するのが連体修飾である。体言の前に置かれて連体修飾の働きをする語を連体修飾語、連体修飾語の説明・限定を受ける体言を被連体修飾語という。

連体修飾語として用いられる語句には次のように様々なものがある。

(i) コ・ソ・ア・ド指示詞

コノ、ソノ、アノ、ドノ、コンナ、ソンナ、アンナ、ドンナ

(ii) 連体詞

アル(日)、アラユル(物事)、イワユル(文化人)、トンダ(事) 大シタ(奴)

(iii) 名詞+助詞「の」

私ノ本、日本語ノ先生、東京ノ大学、ピアニストノ中村さん、あさってノ日曜日

(iv) イ形容詞の現在形・過去形

オモシロイ本、タノシカッタ旅行

(v) ナ形容詞の連体形と過去形

シズカナ音楽、有名ダッタ歌手

(vi) 節

どこへ行く(つもり)、きのう買った(本)、大阪から来た(学生)

このように、コ・ソ・ア・ド指示詞、連体詞、名詞＋助詞の、形容詞など、名詞を修飾できる語句が様々あるが、このレポートで考えてみたいのは、(iii)の助詞「の」によって作られる連体修飾語である。

## 5. 助詞「の」によって作られる連体修飾語

「の」は元来、体言と体言の間に入る助詞である。つまり、「の」は、前後の二つの名詞をつなぐという顕示的な機能がある。一般的には、前の名詞が後の名詞を限定するようにつながり、連体修飾語を構成する。名詞の間に現れる助詞の「の」は実質的に、何の意味もなく、文法的働きを示すだけである。だから、それぞれの語の持つ意味や文脈によって、その関係が決められる。大切なことは、最後の名詞がその文中の文法的働きを担ったもの（つまり、本名詞）であり、前の名詞はそれを修飾しているだけであるということだ。

それぞれの名詞の現れる順序は、構造の面から言っても非常に重要である。例えば、位置を表す「上」とか「下」などの名詞と普通名詞が「の」でつながれた場合も、どちらが先に来るかによって、意味がずいぶん変わる。例えば、「机の上」と「上の机」を比べてみると、前者では、「机のどこ」つまり「場所」が問題にされているのに対して、後者では「どこの机か」が問題にされており、二つの机が重なって置かれている時とか、二階の机を指す時などに、こういう言い方をする。

助詞「の」によって作られる連体修飾語には、形態的に整理すると次のような種類がある。

- a. 名詞 (N1) ＋ の ＋ 名詞 (N2)
- b. 二つ以上の名詞を結び付ける「の」
- c. 名詞＋格助詞＋の
- d. 名詞＋助詞＋動詞テ形＋の

などである。では、そのそれぞれの形を見てみよう。

## 6. 「名詞 1 ＋ の ＋ 名詞 2」の形によって連体修飾語

「N1 の N2」という形は、名詞 N1 が名詞 N2 を意味的に限定する関係で結びつく最も一般的な形である。先に述べたように「N1 の N2」の「の」は意味を持たず、文法的働きを示すだけである。この「N1 の N2」という形の意味は、N1 と N2 の意味関係、または文脈などから決定されるものと考えられる。

「の」によって結び付けられた二つの名詞の意味関係は多様で、従来、色々な分類がなされている。例えば、次のようにである。

(1) ものの属性の指定

1. ものの種類の指定…… ばらの花びら、柿の種、自転車のベル
2. 道具の用途の指定…… 電車の切符、果物のナイフ、ご飯の茶碗
3. ものの材料の指定…… 紙の飛行機、ガラスのコップ、魚の料理
4. もの、人の状態の指定…… 裸の子供、でこぼこの道、赤ら顔の男

(2) ものの所属先・部分の指定…… 図書館の本、花子さんの友達、木の根、鍋のふた

(3) ものの数量、値段の指定…… いっぱいの水、三匹の子豚、十円の鉛筆

(4) 動き、状態の種類の指定

1. 動き、状態の主体の指定…… 火山の爆発、鹿の鳴き声、子供の遊び
2. 動きの対象の指定…… 文法の学習、自転車の運転、庭の掃除

(5) 状況的な事柄の指定

1. 場所の指定…… 横浜の港、学校の運動場、奈良の大仏
2. 時の指定…… 今週の献立、三時のおやつ、夏のあらし

さらに、「映画の話」「チューリップの絵」のように、内容を指定するもの、「ピカソの絵」「夏目漱石の小説」のように、作者を示すもの、「友達の花子さん」のように、意味的に同格のものをあらわす用法もある。先の「花子さんの友達」所属を表す「の」と「友達の花子さん」において同格を表す「の」を比べれば、前者は「花子さんが付き合っている友達」と言い換えることができるが、後者は「友達である花子さん」という意味である。では、「同格」を表す「の」の他の例文を見てみよう。

(1) A「父は今、川村さんとちょっと出掛けているんです。」

B「ああ、あの弁護士の川村さんですか。」

(2) 遅くなったので、デザートのメロンを食べる時間がなかった。

上の例文で、語順を逆にすると、意味がかなり変わることに気が付く。(1)の「川村さん」は弁護士だが、「川村さんの弁護士」という場合には違う。(2)では、「デザートとしてのメロン」の話をしているが、「メロンのデザート」と言うと、「メロンを使って、作ったデザート」と言うことになる。このように、同格の句は特に間違いやすいから、気を付けなければならない。

「の」によって結び付けられた二つの名詞の意味関係は他のもまだたくさんある。例えば新聞や小説を読みながら例を拾っていくと、いくらでも面白い「N1のN2」を集めることができるが、それを単に意味的に比べてみても、きりがいいだけではなく、あまり意味があるとは思われない。だから、多くの人が「どんな名詞でも『の』でつなげる、そこに規則がない」と言いたくなる。しかし、「なんでも結びつく」というのは、もちろん正しく

「N1のN2」という構造は、経済的で便利である反面、誤解をも生みやすい。例えば、「太郎の写真」のように、「太郎が撮った写真」(行為者)、「太郎が持っている写真」(所属)、「太郎を被写体にした写真」(対象)、と色々な意味を持っており、あいまいになる。その中の一つの意味に特定することはできないのである。

名詞を二つあるいはそれ以上重ねた場合の修飾句と被修飾語の意味関係は、名詞一つが修飾する場合の延長に過ぎない。文がどんなに長くても、本名詞はやはり最後の名詞である。例えば、次の例を見てみよう。

- 上の例文では、(1)の「ワープロ」、(2)の「田中氏」は本名詞である。それぞれの意味上の関係を考えてみると、まず(1)の例文では、「日本語」は「先生」の内容を表し、「私」と「日本語の先生」(あるいは「先生」)との関係は、広い意味での所属と言えるであろう。もちろん、「私の日本語の先生」は「ワープロ」の所属先である。語順を換えて「私の先生の日本語のワープロ」というと、「先生」が何を教える人かは分からないが、「ワープロ」は日本語であるということになる。(2)では、「数々」は「ビル」の数量を、「東京」「数々のビル」の場所を、「東京の数々のビル」は「持ち主」の対象(つまり、「何を持っているか」)を表している。そして、「東京の数々のビルの持ち主」全体は、「田中氏」と同格になっている。この長い名詞句を図示すると、次のようになる。

- 名詞が二つ以上ある場合は、本名詞の位置さえ換えなければ、語順を換えても意味が変わらないことがある。例えば、「川本さんの軽井沢の別荘」と言っても、「軽井沢の川本さんの別荘」と言っても、同じである。どちらも、「川本さんが持っている、軽井沢にある別荘」という事実を表明する。しかし、名詞が二つの場合は、先に述べたように語順を換えると、最後に現れていた本名詞が、本名詞でなくなるから、意味が通じなくなるか、すっかり変わってしまう。

## 8. 「名詞＋格助詞＋の」の形によって連体修飾語

連体修飾語「N1の」は格助詞と結び付いた用法もある。これは、先に述べたような「名詞＋の」という修飾語と次の名詞との意味的係わり合いが、あいまいになることがあるから、それを回避するために、一つの手段として、「の」の前に格助詞を付け加えることが考えられる。例えば、「母の手紙」と言うだけでは、「母からもらった手紙」なのか「母に宛てて書いた手紙」なのかがはっきりしない。こんな場合、前者を「母からの手紙」、後者を「母への手紙」などと言って、区別することができる。では、他の例文を見てみよう。

- a. 田中氏は、先月からの支払いが遅れている。
- b. 日曜日までの予定は決まっています。
- c. ここから駅までの距離はどのぐらいですか。
- d. 山陰への旅は忘られないものとなった。
- e. ヨーロッパでの経験は貴重だ。
- f. 日本語でのやり取りには、不自由しなくなりました。
- g. 地下鉄での通勤は、時間的には良いが、経済的には高くつく。
- h. 外国人との結婚について、どう思いますか。

a, b, h の例文は、「の」の前の格助詞がなければ、意味が明らかに変わってしまう例である。それぞれ、「先月の支払い」、「日曜日の予定」、「外国人の結婚」と比べてみるとよく分かるであろう。c の場合は、「ここから駅の距離」と言えないこともなさそうだが、「まで」が付く方が自然である。このほか、e, f, g もこれと同じで、「ヨーロッパの経験」、「日本語のやり取り」、「地下鉄の通勤」と言っても同じである。なお、e の「で」は行為が行われる場所を表すが、f, g の「で」は方法・手段を表している。

d の例文は、あいまいさを回避するために格助詞を入れた例である。つまり、「山陰の旅」と言ったのでは、「山陰へ行った旅」なのか「山陰を回った旅」なのかがはっきりしないが、「山陰への旅」と言うと、前者だと言うことが分かる。

格助詞の中で、「が」「を」「に」は、「の」が付かない。それらを伴う名詞が連体的に使われる時は、(つまり、あとの名詞に意味的に対応すると考えられる動詞、形容詞に対して、意味的にこれらの助詞で表されるような格関係に立つ名詞句が連体になる時は)、それらの助詞は消えて、「の」が直接前の名詞に付くというわけである。例えば、

芥川が自殺した …… 芥川ノ自殺  
農業を研究する …… 農業ノ研究

これに対して、「に」の場合は、時を表す「に」の場合を除いて、「に」を落として「の」

とすると、意味不明瞭の名詞連結になる、または形としてはありえても、そのN1がN2に対して、意味的に「に」格の関係にあるとは解釈できない形になることもある。「～に＋動詞」が名詞化すると、「～への」「～での」「～からの」のように、「に」を、その時の「～に」と同じ意味、あるいは一番近い意味の格助詞と替えて、それに連体助詞「の」が付く。

a. 広島に到着する

\* 広島にの到着／？ 広島の到着／広島への到着

b. 親方に預かる

\* 親方にの預かり／cf. 親方の預かり／親方からの預かり

c. パリに滞在する

\* パリにの滞在／？ パリの滞在／パリでの滞在

d. 4時に出発する

\* 4時にの出発／4時の出発

上の例文では、\*印は普通はありえない句を示し、cf. は形としてはありうるが、意味的に「に」格の関係にあるとは解釈できない形になることを示して」いる。？をつけた形は、ありうるし、意味も分かるだが、実際には次の「～への」「～での」という形の方がよく使われていることを示す。

最後に、格助詞「より」の場合は、「から」と同じような意味で使われる時は、「博多よりの到来」のように、「から」と同様のふるまいをするが、比較を表す「より」については、「N1よりのN2」という形が思い浮かばない。それは、「Nより」という補語をとる述語は、形容詞、名詞的形容詞であるのが本来で、それらの名詞化した形、ないしはそれらに対応する名詞を主要素とする上のような名詞句の形成はできない、ということである。例えば、次の例を見てみよう。

a. 新幹線が飛行機より便利だ。

\* (新幹線の) 飛行機よりの便利 (さ)

b. エベレストは富士山より高い。

\* (エベレストの) 富士山よりの高さ

## 9. 名詞＋助詞＋動詞テ形＋の」の形によって連体修飾語

二つの名詞の意味関係をはっきりさせるために、名詞と「の」の間に「～について」や「～として」などの句を付け加えることもある。例えば、「女性の話」と言うだけでは、「女性が話をする」のか「女性について話をする」のかははっきりしないが、「女性についての話」と言えば、後者であることが分かる。では、他の例を見てみよう。



- a. 彼にも男としての意地があるはずだ。 (=「男の意地」)
- b. 将来についての夢を語った。 (=「将来の夢」)
- c. 地質学に関する本を読んでいる。 (=「地質学の本」)
- d. 国民に対しての責任がある。 (=「国民への責任」)
- e. 地震によっての被害は膨大なものとなった。 (=「地震の被害」)
- f. ワシントンにおける首脳会談が終わった。 (=「ワシントンでの首脳階段」)

上の例文はすべて、「助詞＋動詞テ形」という合成句に「の」が付いたものである。このような句の付いた表現は、かなり改まった言い方に聞こえ、特に書き言葉によく使われる。上の例文で「の」が付かない場合は、副詞として後に来る動詞を修飾することになる。a～fの句それぞれに対応して、「に関する」、「に対する」、「による」、「における」という句がある。意味は同じだが、動詞の終止形が使われるので、「[国民に対する]責任」とか「[ワシントンにおける]首脳会談」のようになり、「の」は使わない。

また、「による」と「によっての」を比べると、前者の方が使用範囲が広く、「コロンブスによる発見」とか「毛沢東による革命」などと言うのはよく聞くが、「コロンブスによっての発見」とか「毛沢東によっての革命」というのは、少し不自然に聞こえる。他にも、原因を表す「病気による欠席」や、「～に従う」という意味を表す「旧暦によるお盆」などのように、「によっての」で言い換えられない方が無難な場合がいくつもある。

## 10. 結論

以上、助詞「の」によって作られる連体修飾語の意味と用法について調べたことは以下のようにまとめることができる。

- 助詞「の」は二つ、あるいはそれ以上の名詞を結び付けるという連体修飾語を構成する働きがある。「N1のN2」という形式において、助詞「の」は文法的働きを示すだけであって、実質的な意味を持たない。「の」の意味は、名詞1と名詞2の意味関係から発生するのである。そのため、「の」に様々な意味を持つかのように見えていたのである。大切なことは、最後の名詞が本名詞であり、前の名詞はそれを修飾しているだけだということだ。
- 「の」で結ばれた二つの名詞の意味関係はあいまいになることがよくある。例えば、「母の手紙」は、「母からもらった手紙」、または「母に宛てて書いた手紙」など、という意味になりうる。だから、そのようなあいまいさを避け、意味を限定するために、よく「の」の前に格助詞を付け加える。次のa, bのように書いた方が無難であろう。
  - a. 「母からの手紙」
  - b. 「母への手紙」

また、二つの名詞の意味関係をはっきりさせるために、名詞と「の」の間に、「～に対して、～について、～として」のようなものを付け加えることもある。例えば、「経営方針についての説明を受けた」のようにである。

最後に、この助詞「の」による連体修飾の意味と用法についての研究が日本語を学習している人たちの役に立てばと思っている。

### 参考文献

- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版  
寺村秀夫（1992）『寺村秀夫論文集 Iー日本語文法編』くろしお出版  
国立国語研究所（1992）『日本語の文法（下）』大蔵省印刷局  
宮地宏（1991）『外国人のための日本語例文、問題シリーズ 17 修飾』荒竹出版  
藤原雅憲（1999）『よく分かる文法』アルク